



遊揚無底抄

尾

特別
~12
1077
50





利
1077
4950



寄生

私年立六廿三四歳ノ由載之

花鳥六廿一歳の麦より廿二歳の

麦よりあり

年立六廿二歳云々

廿三歳

中納言

私是ハ早蕨乃前此年也其具
載之

蘇童女御正殿女二宮御事

夏母女御卒去依之女二宮御事

着延引事

四十九日之後女二又系内事
秋未仍幸女二宮及臺御後菊
事

又源中納言抄懸給事

又晉左大臣六君御事 右大臣

とくまら女いあやもくた

按案使大納言納梅西方事

此時按案大納言の右大臣より

給ふあやり大納言の事

時より告部口文の中君成

あやけり子に上りてりし乃

官とくまら之物預作者此初

年立三六三歳
廿四歳

中納言

私記為三六二歳とあり後抄七

四より早蕨同時

夏女二宮御陰服賜事

御門从女二宮御令嫁於源中納言

給事

源中納玄不忘在寧法始志
事

夕旁六君可嫁告部以文事
可為八月夏

寧法中君自五月比懷孕之

八月源中納玄折槿花集二系流
奉見中君事。

此次多物流事

十六日告部以文嫁娶之在太

六系流東所敘

二系流中君持詠賜事

明日告了卿文奉文以六系流
事

与二系流中君以物流事

六系流所也事持集之 继母落

葉文亦之流

告部以宮出六系流流事

三日夜餅

源中納言出六条院給事

源中納言宿按察使君房給事

出了卿文畫凡六君給事廿二

歲云

出部以文出二条院給事雜

有事

中君卷文出源中納言事

可出字治賜事

又自源中納言系二條院給事

隔几帳對面事

押入母屋中

不及矣事明日在文事

出了卿文渡二条院給事

源中君後為給事

二三日

留賜事

源中納言送衣裳出二条院事

源中納言書有數書出二条院

事

源中納言又系二条院事

入卷中取后僧座始事

中君语也尔習悉事於源中

納言為最始君形代也

九月亦余曰源中納言出字法

文了也

召出并厄對面也 正阿圖

梨作西忌日繼仙事

壞字法故文可為寺事

源中納言其夜為字法与并

厄首物語事

源中納言同形代事也并厄也

妾申之事

古文也子母曰中将君也後為陸奥守
妻陸奥守又為常陸守也

女歲二十計也

於字法抄萬部系錄二卷流

給事 若了心文見之中君

有又也事

菊盛名了卿文亦中君合也音也

年立三十四

夕音大臣系二條院給事

十五歲

正月任權大納言兼左大將

自正月廿日中君惱賜事

直物日源中納言任權大納言兼

右大將事

系二條院有答拜事

於六條院設大納言事

兵戶卿宮渡御

二月二條院中君誕生男子事

御產養事

基子錢事

廿日余殿壺女二宮御裳着事

又日大納言給事

御門賜湯又右大將母儀入道宮

事

宮着君五十日事

大納言二條院給事官着公給

事

三月晦日御門渡御 散壺事

義兵宴す

内贈物事

内指

大将賜天盃

立文臺講

和号事

初云按察大納言とされしは
ゆとらんと思ふ事なり

は按察大納言とあり梅の右大臣也
此人女二女の母義兵女御と
いふけて我々事なり

とてい女二宮とえは
ひつらくられしは
の大納言といわれしは
それハ物納言の家より

其親女二女退出大将之弟女事

四月大納言出守治造御事

常陸前司女月長若寺下向

大将垣回

大納言出守治守母傳事

寄木

或宿木 以能為卷名 叔

花詞よみみ山木よ庭よりより葛花

多しあり

庭より素とるる千の末たりと

の揺ゆといふゆゆゆま

一名白鳥

私に名 花界秘養亦 吾沙法大

ふかより此勢も実一に明くやと

志けし紙分て多あそ為あふ

花

庭より木の年よりあり初よりいみ
山木よりやよりきりか葛の屋にあ
こやよりさの木わわとつみ物く
葉よ葉寄生とてあり葉は木
よ生す又楓乃樹也と生とつ
と庭より木とよの木にわかれる
物なれは若成よりてよりまのこ
と此やよりさの木の河よりあより
葉亦一歳乃葉より亦二歳の
ままに此事あり二月に直物
の派は任右細言葉大将のより
んんんん

葉

此春葉亦二歳より亦五歳とて
並りありこれとも置換お交
りありあはれり例あり別
ははは春権の末より総角
よ宮乃月忌乃事ありつり
年此より早蕨の喜ふとれり

りりて又次乃色おりのまう卯
月申すれ事

秘

卷名心あ号し蓋古三より古
の年申す三ヶ色おりのまう卯
早蕨春より前乃事く推し此
まよりあけまは子蕨お事しこと
まよりあやせみまより物してあ
事成つておまより玉響春と玉
はより乃君四歳の色より事

と書て末ハ源氏のホム乃事よ
あよりこは春と友壺言二女れり
いんより前より乃事とくまより

これ物迄の例也 箋

箋

寄生ハ寄の一字ツモるより
本とよびたりこまにやより
とつて素寄生とつて

う乃比後つかとまゝ、ゆかひれたる

との女御よたんにわたりし者か

竹川巻よ夕音たははよ辨ら

うしんしうりはねとらりさ

まろしうせりるるたははとら

その人誰ともみん系あふ

菟臺女御 大菟御 後理たまの

父とんしうり 今よの若菜下よ

位よつさうよよ言文とちて事ハ

りまゝりりさ記乃事大らうへ
け最重乃女御の赤文大御ら
あり給て女二宮城うこまう
女二宮の基大將の室よわう
まふん

大長

梅うえ乃大長若菜と乃と此人

大藏卿

此大長古き系圖に梅の枝の大長とありや
まうへ行幸しりる葉上まんの大長也

源理大史

此二人女御のむの腹まわら

藤壺女御

介上春文乃御時より

あうゆりの明石中まよとされ
くひ美女二宮よりとうとて
まうりう遊ゆりよりをり
さうりんくあり梅うえと藤原
ととこつへと君此人よりや
た大長のと君と藤原景敏と号せ
この石中まよりとくあり
まうり又いた大長つる系圖
の梅の枝乃大長とあり

約幸卷より若菜と申す乃
た大臣也 箋

見系圖三君藤景殿 梅之元
の巻に明石中宮よりありて

人々乃内なる一

それ比と之海に権中乃始成さ
してよみへ一故た大臣と成

と申しへ一約幸より若菜
上申す乃た大臣也

申す喜文と云う一とき

方くよりひとや成るてまわれ
ふりて

今上喜文の西時乃事く
人よりさ成り

明石中宮よりと云はれ

申文よりいふより人

ゆふ中より
茶乃事成るてゆふの女はあす

中宮あれたかくんり

あから

義 多くははくもとも

女もやいさしり

義 今上女二文

よりいさしりか

義無女侍の文

あれ文とさたしりしり事のはらへん
じりり

義 女二文

はかうらといさしり

義 女二高はらうら

女一文と母はらうらいさしり

義 明る中文版

ちかむらうら

義 父長大臣

義 故大右衛門政家

好まふあふ

ゆく〜〜〜

秘 女御の御りて物〜

十四りありきや〜

まうり物

秘 女二宮へ

清さうりいりげふあ〜物

秘 尤大臣へ

女匠友〜あ物のけ〜

〜〜〜

秘 推本の友〜

〜〜〜

秘 宇治の大系〜

田代とね〜

今よ〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

おろは

^秘 枯とてまて時そありたれ當れ也

^秘 うのろふくにまあまされし

^秘 うろいそそ中してそふろふ

うに色れまされぬの也

中これ由る也

^秘 時むのそれあられうりはと先女二

ふ成まよ乃西鏡しそふそ

うあ

うけくうとるまこふ

^秘 主上れ鏡をあらく

おとろあつらん

^秘 ありこころ

おかといふおらんとは誰とあ

しとのゆき

朱雀院の始ま成六条院り

ゆりさあ

^秘 女三宮の例とあるまなり

志りいそわあはらにらあうて
とわらうあまうと

花

朱萼沈の女之ふくと六条院り
ゆうりゆー事あつてもあふ
とふ不足おる事あつてもあふ
かからずとわりぬくくそり
こもと葉大おのくゆさうまて
とよりーろさうしきぬとたれ
と又ーこそとあふあふと

秘

宮中いあれうらうらうと
とこいさうーと今あつては葉と
女とあもりらぬとこうはあわ
と包んこぬくまうとせと
女三子の辰六条院りーとさうゆ
事う妙くもとくといひ
しーあふーあふと

翠

葉

所んじりがつふふ事

美

女三の西身此上よ不意の西あや
せらるゝとあらんとも

ことわくも所らんすの世や

美

女二又此より今と所位のわ
まやほしーろともさういふ

とねほらうし

やうてそのは井てあました

花

朱薙院女三又と六条院

梅ゆり素あまーせ乃つ井

てのもまろり今とまの女二宮

とろり中細えりあはけ

まほーくねほらうし

かろり

秘

女三又乃例おとせ 昇 義

しよりあまろりとも

昇

あまろりあまろり

大君の存生時を大

あふくくわのまゝにわらふ女に
とふあつてさういふ事
とうらまをなまのまき性
又おたいまき事
あふ人ありとて女に又おとら
うり志んくまのまき事
とまき乃性成はつてくれ
いふ事

津井あつてやうに事なると

えあ

^秘 申すに定めてはかあまき
又音の六君かゝの事あ
くまのまき事あ
あまき事あ
あまき

花のまきと夕まき事
あまき事あ

申はらさのみこらんつまらん中池

言源のあそんか

秘

上野のみことみと云は中務之なる
今と此の女子は中納言源朝臣の養
子將之西氣ありて人々を平の時あり
その人乃官姓戸と養子と云
事と云

秘

中務親王の今上の女子は上野親
王の當代の親王とありて人々を
中務みこと今上の女子は上つを云

みこと一人は中納言源朝臣の養子
と云と云と云と

養子と云と云と云と云と

養子の面目ありて人々を

養子と云と云と云と云と

養子と云と云と云と云と

養子と云と云と云と云と

秘

養子と云と云と云と云と

いづれか

花

女二文の母女御の所へおあつ
あれは物乃事かといふまじき
似あはれぬ少なり西春をい
りしす

いづれに日成とてかあれぬてこ
まはれんし久きとてみらんや
いそほみなりかたなりか
夢

花

文集十六送春唯有酒銷日不
過甚といふ詩の句成りて
つらき日とてかたなりか

いづれか

花

基局消長夏とあり
銷日不如春

延喜七年正月三日御記

朝觀
行幸也

大長春日還御之時可寂實
宣因基持懸物有好馬則基

局式了卿親王とたた大臣共同
此殿別當春野章麻毛御馬
立庭中一局給た大臣勝
いひとやうにきらうく

若ふといつひよくく
一若ふといつひよくく
多ふといつひよくく
此のう物いもあふく

賭 ノリモノ
ヤケモノ

花
若う物いけ物い所門の所奉に
しけりせ若ういもあふく
若うんと若ういもあふく
あつたれまあふく
女二宮乃事成りしつてかくの
たつり
女二宮乃事成りしつてかくの
あふ

死

延壽内集時多けり枯竹野一乃
花ふれと霜の籬小海ふらふ
能宣集川そめて世とをよめる
松ふれと縁の多たあせとちふ
今業女二文乃をのじけよと
是流つる事と下乃をいりよ
せ流つる也

秘

女二宮の母女御ととちりよ
海とにいりよ

策

枯かゝ園海あり菊たけり母女流
園よるもと女二文とちりよ
して祝し流つる也

行りくか乃めりせよ
主よた世に意あり沖氣文あ
海へ

まいた心のくせふれは
意乃心くせ也

いそやかいせと何しにえ流くも

おしあらくて乃西幸とて

秘

中君成婦志大しうかくりにと

の如ひし事ととて安らう

し事とつり

秘

女二文とて女念ぬあすとも

治北大君の中志と持ゆり給

ととて安らうてあましく也 兼

あしあらしにち成はくす

人の如くをあらう給へ

女二高へら成はくす人とも

と也

さしあはらし母ありせば

秘

女一宮ありらるる

お好しくも

あまらりあはけあらしきる

蓋乃あまらりたうをほひらうと

許しそつり

たふらふのほのさう給て大君の

さうりらとひそかにいふもの

死

夕音の竹川巻はたははり
物と右大臣のあやまればは
あまの女御の父はまはるる
よふりて志すくりの右大臣

とつろや

古本作右大臣これも女子細乳
但頼虎之御之記多し義之御
よふへくさう之夕音のたはは

あり事分明のゆへ

養

養ひり女二之あはれはすか
とさうて夕音乃あふは

一本は桑葉とあり又の六君
りりもありいつ違ふて夕音
の六君の事

かたさうりれはあありと

白文の六君はたははりにあは
ととるはさうん

氷のふりしるるさうりんとて

16

作瑠物終云昔久々のこの大いれ

女あてつよまきれんあそりかく

あそりさうりよあそりまきん氷り

さうりとひすひり物

貞信云

ほもまはらうり此寺にうり

あそりせとつあそりと氷のりうり

花

氷のりまうりまのり凍不通と云

たふさふさ人の雪あそりて

すささるる氷とふる氷くま

ふらふらとれらうりくさじ

こよあそりんあそり氷とあそり

やうりあそりんあそりあそり

のまうりあそりあそり

秘

うはあそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

下船るあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

高母とむねすや 美

大坂くしきういに

弄

白蕙るしあしそいじしき

ーとて

みしにじしきあま

美

又吾れあまの女二文乃事し

そしきりけよの如し

美

至しれ浄事と又吾れしる

あしきの如し

中宮とあまやうたうみ

秘

明名中あまとせうみ如し 美

弄

白まれは心りあはれぬ中ま

ちまを

まにあしつてい

中まれは心

いしあくおれ

秘

明名中ま 白まれは心

あま

みこころのちうりるをいふ

^親親王達の所外戚と云はるる

と此様おしりて所位をいふ

ことわりあり

人の世をすまはるるなりゆき

^おおとよみしおぼす

きんぐと一しうさうりわれ

凡人とておまて又いある

まうき事とてこれい白

文中書はりらるるおの

たふえ

かのたふえ乃まわらるるおの

うら

^花夕香おしるるおのたふえ

文と二つとまわらるるおの

事へ

^お夕香おしるるおのたふえ

のたふえおのたふえおの

まふしとて

美

夕音は音井の存前美文友
内侍のすけおとあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとて

昇

東文おととて

秘

吉宮御即位乃後の儲君

ミツケノキミ

おほすて

つはあつとてあつとてあつとてあつとて

つはあつとて

秘

白文おととて

美

あつとてあつとてあつとてあつとて

あつとて

秘

夕音乃あつとて

昇

夕音あつとてあつとてあつとて

美

夕音の美あつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとて

あつとてあつとて

秘

當時右大臣是右大臣と云はれは
心ゆくは終よりりて前乃つひつ
けより官をとりて 兼

昇

致仕大臣二男お梅右大臣行川
右大臣と云はれおとく大納言
とつひつけより後大臣おま
ひとありたり

あつたのゆゑと云は

秘

梅案大納言女中君まらり

印梅巻よせうと云はるやま
と云ふはれ終り人にて梅案
大納言いし時右大臣是終くと梅
案大納言やといはれしと云
りり白文の中をとりけ終
つふよりりてり此官は終り
物終の作者乃初
号号了るまの所女まらり
た大臣のまらりしと云は

秘

花の香のけりりぬ

翠

早蕨の巻は春のけりり

秘

蕨亦三花の終あけまはの

ひしあまの

美

私は昔々か花の蕨亦三蕨あま

中花の末と同日の明かまは

蕨亦三蕨早蕨乃春と花

あ

女二文も西あくつてあれ

秘

亦四文は夏人

私早蕨三蕨亦四乃春と

うと花をりは初あけまはの

事花の香のけりりぬと

初はは女二文も西あくつて

まはつとつ初の中 同とあ蕨

の春あけまは

さしこころは

春

蕨乃春

美

今よは西あくつて蕨乃女二文も

西事とヤウしてゐる中から
——中より——

しむたにゆかへ

まじ此脚の中とまじ人の名
ふく

おひ——たう——てかろめう——
いせ給

意のゆへに——あしむゆへに
く——ころたかうか

^秘何ふ西のう——あつてゐるとし ^昇

私よりうりたしむゆへに
事あれハ句端乃事と云
うり

ま——西事——成もたし

^答意のゆへに主上此いつはと
や——定をうり押と西事と

るる

十代まひ——人の

宇治の大君女 美

うゑそく〜契う〜

琴美う〜く〜何と〜此宿縁

やん〜れぬ〜

いお〜志好〜ことと〜か此宿何

〜さ〜

枝大君女の御座へ〜と

私養女の大君の御座へ人々

〜此大

浮舟美のり〜と〜席へ

じ〜と〜人〜此燗

反魂香 前勅

御ん〜と〜さ〜

董乃乃〜り〜女二文女〜の〜

〜きぬ〜

木の太極美あ〜い〜う〜ま〜ら〜八月

〜り〜

太極美居夕寄〜早蕨書〜此八月〜

いさ下白文とじこころ余り
事々 昇

^養八月十六日に白文あはじこ

りし

二条院のぬい乃所

^秘申す

^養宇治申す

いそく教あはあなり

申す此身の上はるる

あさおら

白文乃西平姓の

めあらし

^養いしむ

あさくに

^秘は種あはれとあり

は井あふ山

^秘あふ山

私白文

宇治里へ立ちよんて

登って江の女をまうしよりの山に
のちらあらん

二条院へひくくまわしてその

まうしよらこふれとあはれ

とこふれとあはれとあはれ

立ちよんて人まうしよらん

乃まわん

山のまうしよんと

おりしよくしよあはれ

宮のまうしよとあはれ

ひく

八文女書しよあはれ

事

弟のりしよれまわ

弟のりしよ蓬のりしよ

あはれしよとあはれ

あはれあり

^秘 志乃をとりとつり相つきの
巻よび初あり

心乃うこ此流しやうあは

志乃うあはるん

^秘 心乃不動うり

^義 大君のちと異相なる様目人乃

心乃ととらふし奇持うり性也

と中志のねはす

り世りおむ様まはは又

心乃

^秘 大君乃の 意れんとも

あはれん

おれれいともくいつては

心乃

^義 男ハそのまきぬ物うと

意りともさうらん

あらんうらう

心乃 心乃うらう

昇
姉君のこやうよめておらせま
し中君のこまきてとめて
うけおとすはいせしせせ
私よりさほろむたの事へ大君
存生おせまうし海とくも危
かておらせんとくわく 花
かう又ゆけしとて我といいた
八宮大君と云り 養
何ふいふ物

白文(い)るあふなりしとて
んせしをまうしとて

笑ははのりともあられ

し方々事についてくつまれ
うけしとてかういふ物

こととておとすそくも責よ中
君はしとてくわく

養
白の下ふありてはくも
まふとては

秘 懐妊の事 昇 箋

あつたは此のれいひくおしやうかきと
とせ

白文懐妊の事と人知れぬ
ゆゑ暑氣はあり中君のあや
ましきしとせ

馬家へてあやめ

白乃すう不安しおれりて
懐妊の事とせ

のまゝとせ

ハ月ハツキよりおしやうあはれぬの日た
卯よりそ

秘 六君乃事と 昇

六君嫁娶の日紙よおしやう中
君乃はれぬ事とせ

宮ミヤの事とせ
秘 白文の事とせ
とせ

私のくさんといはれはるる福也
我といひおんほくし中君は
んくろしうてうくおしと
まふと中君のんあいの物
つめはほくくおほすとい
書にああとい

志はひいり半あといわぬ

^秘以下弟子比といりていり

私中君のんり理成つて

今一版併しそらく

かくつうなひあはる

^秘中君のうらう始て後一日

私れは好くあつていりて

んくろしうてうくおしと

^秘白のんり今り私れは

あつてんといりてうらう

しとあつてうらうといり

あつていりて

夫乃此ハ云此ク所ニシテ

^秘あふさんの文此所ん

ひりたりたりたりたり

ともむつともむつ

^河かゆりたりつともむつ

^并俄り物成ありたり

本号

つまむ中君の文

^美あつりたりたり

中君此はくくのもん

中と云り

私に此の文は

あふさんの文此所ん

物成ありたり

是ハ自文の意

たりたり

らあつり

あり

中細之後といはれし行へん
れし

荳の中君成るるや
ありれしおのすし

白中君とありれし
あつしとさしおん

たつおんありし

女
こつといはれし
夕音此ありし

夕音のありしとく
入事へ

ありし

中君よありし

あいの

荳乃我ゆありし中君

こつとまはれし
そたつと責めし

かあしにゆり

いそふち〜つら〜か

白文へ中書紙ありせし事

め〜く物くあり〜

^河め〜く〜
^昇秘箋

^死いやあり〜

め〜く〜と〜
又い巻の下に詞あり〜

秘りけ〜とあり〜

ふ〜と〜又あり〜

と字法〜

と〜あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

あり〜

所用念あつて事うと業の
うそ

此のおり此事おとけてと

^秘 是時の奉公と今ハ内給ひ
物事と物事

^案 浮舟よ白乃密通の事とく
今入と地く

於あゝれふたすみりはり
やとれふ人の女乃とあはれはと

あゝ次

^秘 朋友の交り成はくすふゆ
あゝ海の水とちいとたり
浮舟乃事よと結くうり
事之女れ心りいのちと人
一切人志心なくあること

^并 業乃心り朋友ふと此交り
交りたてていとあひまふ

私男女乃る情をあらはれ
友人乃る台朋友のまはり
と悪くうたせ

一とたに志をこぼれあひり
いとあられくわがくは
おろし

、^義 蕙のまれと我ら成る

私大君一人、蕙の心志みて
うつぬゆへに白れはうへの

あてをくみゆると

云ふおれ

私のつとじあふみ物

^私 大君へ 義

これきみとまはり

^私 申すんははきみは捨りや

らして思ひあれうと

と南らんくまはり

^私 総角書あり

昇

母

孫王ふと此女房と女三此法もた
尋とりてとまき孫の家へ
女三又のあゝたにあふ人ゝらへ
は字法の君さうにむゝらう
孫まゝとまゝ

我ふらゝ孫らむそもあふ

つらひあゝありしと字法乃
姉王の事らうりあふつら
は紙紙らけりわ孫ら
らゝまゝ

明ふらゝあゝとやうは孫ら
世

死

朝ふらゝは孫らまゝ又乃花家
まやあゝ孫らまゝあゝとやうは
ひまかり

秘

朝ふらゝ

何

譬日及く在徭垣雖盡而不
悟
注曰朝菌也世謂く木草或謂く日及也
文選歎逝賦

日及ハ朝ふかの若く

くしとめおる

松

誓ちけてより心ゆく

明ゆくさむ

水の流まきりんか

松二条流小中君ありて

二条流より水よあそび

二条流乃事へ二条文より水か

きくこと 翠 箋

又ハさあより心よあん

松

白文此亦あそびて

松白文此は行へ申君へ

心ゆくありてあり

さぐれ町のむいゆ

松

さむあそびて心ゆく

中君へ意の初へ

日とあそび

松也まきり日あれ今朝乃

同中とて

ありて世の中に

私庭よへありきまのうと

あかり

えんきらりつらめさそりて好

活らり

一 私天候の容候へ好交の人よ

ハ細らり

朝のやをいせあふ

^秘 約款のうつれあふさほへ

^意 筆さされの多あやめてんとく落の

こゝろなり明れ花とみあ

私切くさうれくさくやすま

物とみあくさねりていこ

大君乃事なり

^舞 こゝろ世候めてんとくさ

こゝろれ世とみあくさ

めていへまといふるこ

笑

と胡のろそこの盛しとくれ
病りくれ病りくれと作
うあは花うとく

秘

とくくくくくくくく
母文のくくくくくく
ふとく

花

女命むくくくくくく
くくくくくくくくく
とくくくくくくくく

一

なはなななななな
つてくくくくくく
とくくくくくくく
名なれくくくくく
くくくくく

弄

川号

花号

笑

是ハ蕙の性く花きて
おき物にくくくく
とくくくく

ゆゑにわがまはた音から地

秘 新のあはれよ志さうひて音れ

わくはんてりる音

やしらへりけちくあさり

ゆつらんり

美 白文のおらせぬ時

かじしつとあはれ

一 蓋は用念あるさぬ

朝もこの交満さうたにたりと

花 まさきい連く

秘 川音まても形

川音よなるす 早朝さうゆい

ゆつらん

美 川音の詞りりて川音さぬ

奥入る

こつしとまゆりて

并 かじしとあけさう

女房の内さうひと

細
古格子とまじりてをりて——女席の
内けつひと忍しりてせ

おりて音れ満えれう

細
これよりト車——まじり

宮の母ひりりなり

細
白文の西入りと思はれ

まじりのいさな

白の入り——あまの音り

萱のあまひのあま

らぬあまりたさあまらそ

一 萱のあまはとつまらん

あまじり

あれよさうくとゆりせまら

私萱の初

うねみものあま

細
お候ちりけうじり

あまじりとえさうりぬ

細
細のいり 屢々 数日

西よの兄中此ら〜

ワ〜いふり〜

^秘大君よ〜何〜

うらるや〜んか〜

^秘大君の病中〜

〜く〜〜

兼の詞 昇

〜り〜るや〜

兼の身よ〜

〜して〜ね我身と〜

〜り〜る〜

〜て〜

〜る〜

〜い〜

心〜

事と

〜

〜

うれ事へ 美

はくさくくのれと

官位のを世間の身は秋を
定れりあひひかりりそれいれ
りよるやうにれよりあはれぬい
るやうの事よりと罷りてれ
るはれりさそあしはましくり
— 業はれまき

やうくあこもてせくと

^秘 撞とッリ

^美 物あゆのうりあきあき

あゆりうへ

篇中へ朝あきと入るこ

^美 ころんてそふ人りけり志し露の

らさうりつとさうし物教のくれ

^昇 姉君よさうんていふんとよみ

うらり ^秘

^美 世よれさうれうを朝ふとれら

さういふことだ

こゝろひろくしてゐるよ

兼 業の用意と此法に倣はれ

しん

秘

業の進退の志のうつらふ

うつらふす 露とらうり

りの中だ

しんひろくしてゐるよ

うしとせのうしとせつる

ぬい

とんあうか

秘

露のとんあうか

こゝろ中君は自嘆へ

とんあうか

兼

こゝろ中君は自嘆へ

秘

下白の中君は自嘆へ

兼

清ぬまに建ゆふあひさみ

事しんあうか

かきまねと讀む詞ありて
志くすすい露の命れくろれき
何よりけむしつる奇あらは
お付へ——未見及 此信見れ
しつる

ねは花詩奇とのせられま
猶お付しやらほし 然れ皆
ほしき

中しそくしす

^兼 大書とるしつる

秋の穴はしすう——たう免乃ま
しつる

^兼 薰字落へ約より事とわたり
うらつ物中 腸切 是秋天の
心あり

^兼 薰の平生心り 然るあり
秋は秋の切あり

庭と中しとまのしつる

とく

石

さしあきつてくわうし宿願
や庭と難と枯の形も成

私法抄下載 卷一ノ号

承院のせぬて後二三年はまに
世はうじまの始り一 源院六条
院あとうのまぐ人乃んまめん
くくあえ侍りまふ

六条院通世一始り事

は初小君くわう 源院、桂院
又栖殿寺に

私法初乃流くさやとわたり
一 乞の承院と源氏なり
源氏乃西世乃末二三年西道
世より源院とくわく相原
氏うせぬて後か乃源院
六条院よりとくわうのまぐ人
くくわうとく

水原之世流うじき流しあり此
 流はより大なる右流を心取ふ
 實也と河海云 六条流道
 世し流けあり 計初り
 思くより流破流れ桂院に栖
 處と流く 今葉取院ハ六条
 院と中川の院と世に於て流二之
 多りありあり末世流うじき流し
 流破院と六条流と流う
 ありくありの中流しハ草木の
 文水の流し流けてと流破
 流し流しと兼大將あり
 其時之事とくく流人の流し
 と大流院ハ葉上よりあり流て
 あり此流し隠居し流しと
 幻界の末し流破し流しと
 ありありありて水原抄と
 ありありありとありとあり

河海より如藏の院と云ふなり
きくうにたりて六条院は道
事一は初にんくうなり
さきうり次は清藏院と桂院
栖霞寺とこれとのせうけり
いあやもり也清藏院と大
覚寺とさうり大覚寺と清
天皇の離宮なりて脱履の
義和元年は清藏院よりなり

清く回史のせうり貞観
十八年小淳和太后の家は奏し
給へ寺はあはれて大覚寺と
名つけ給へ清藏天皇昇遐の
後階庭不被臺樹亦壞と云
奉國史よのせうり清藏天皇
乃さう院小世成のれまし
る事と云ふ六条院のあり
りさうり給へ清くうり

秘 大正事ろりく
は宇治の文あま連らう候て若
のりとりおふかとりてひらり
ろりり 昇

箋
秘 うれいこと人とりり

はら北院の事 花鳥よみりり
大覚寺の事 淳和太后の云あま
養して大覚寺と号しりり
と云 花鳥法 和太后とあり

改二為淳和

箋
花鳥の義用

か乃西あまり人のかこし心あま
人おく

秘 是よりハ衣院うせぬて六条院
よゆりゆりゆりの事

六条院

こころくまあれちりけ

箋
六条院よ法とひりり

あつらひの海すまの舟

あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は

物あつらひぬ心よ

物乃ふ別あつらひ

口をれ草あつらひ

あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は

あつらひの舟くく乃みれ世は

あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は
あつらひの舟くく乃みれ世は

毛詩云北堂賦萱中能忘憂
本云北堂儒者居所

は在り萱草も忘草くく

は在り萱草も忘草くく
は在り萱草も忘草くく
は在り萱草も忘草くく

つとれ草の愚草乃一石也又
萱草と云ふ草と云ふ草は
てふ草と云ふ草と相違
る也

これ右乃おとと

夕音く

じりくにうらうらやうに

源乃世成る出かた

あひるにうらうら

源氏ゆれゆ一時の事

かろりあ一の形さ

六条流れ世成るうらうら

そのおりの意の事

一と云 苑并美

行これらに愛して

大君のうら 并美

おれしと云ふつひ

あれと

秘

おろし〜如くおろし〜いふれ

し〜うり

美

源乃時の事〜大君れり〜

同女常〜う〜

私に任後版ノ御ん
於此如午書之者也

はみあり〜い〜う〜て〜や

秘

大君の志〜う〜う〜の〜

え成り〜お我身〜り〜病

はさ〜り〜う〜と〜

私に怒のき〜り〜は〜

事〜源氏の事〜は〜

〜り〜り〜大君〜の〜

慕〜む〜の〜り〜

はみあり〜う〜

〜り〜り〜

董れ〜は〜

音乃〜り〜

美

姉君れ事

美

大君の〜り〜

秘
以注平三朱考

中君さうりしとてけきまのさうげんを
あられ成へしとてけいほよ
おろひよりよくさ出れおつた
まふものわさきそへ入懸しとく
笑す中君のゆき
大志の志しあうり句文とて
さうりゆい我身此事とさひて
病つさうりやとさくしとて

私は信の前後よりなり終るをま

不當河は後のほみやと存とる

よみ朱ほくし

あられとさうりしとて

まのゆきと中君のゆきとあられ

しとさく

せりうまのりいふと人のつひ

とて

解

中君親山里の物の号 山里の

まのゆきと中君のゆきとあられ

まのゆきと中君のゆきとあられ

秘
うきよりのいすみよりのきり
川号山里の物乃さひりま
中君の山里さくおひさうは
まの世れい紀事い志く城始
うれいさうくくま事いさ
身りまは世中につみか
しこそい世乃うまいさう
山里りかうい紀事乃い
わき

美
川号山下同

弁の尻いさうやま
美
弁の尻北号法いさ
やま

松尾いさういさ
いさ

美
おろさうあしり北
美
おろさうあしり北
美
八宮の身いさ乃いさ

おこるなりやとて

抄

父文中三年の四回とん子あり

石用く宇治へ行てあこなり

やとて 矣

弄

以世初為年三回より年忘れ末の

初よりくして三回よりた

まふとありるたふひそあはて

とさめる又例乃かのけ忘日

の經仏よりあまの九月なり

婦君は忘日と此初めては春

の始、権中角總乃町より

たふすもみてなり

か乃をより寺の證れと忘と

宇治の阿因聖の寺へ

あひのてよりさあはれんやと

弄

中君の初へ 秘

あつこうしとあはすとも

秘

堂の初 宇治の文れ事

昇 蒙乃也

古文の西三日の初乃あさりに

義 八宮へ

昇 年忌れ未定

私八文の薨十りの薨廿二の
の八月へ是の廿四の八月
る連の年忌の忌未定

切 此の初乃あさりとまじりて

字法のゆり文と寺にる千人

事へ

秘 彼乃須寺にる千人と
昇 字法あしと寺あしと
字法をん

とや

此みりるあさるに

乃乃をいよむ執のあさる
すと寺あしと切徳れ
の切徳る人
あさるに

箋

おろしきりやうのまゝ

経佛のこころよ

并

中書

秘

中書在文の忌日の作意とせ

まゝ

中書にありからや

箋

中書の内中法に定法(この)

やうの事みまはり并法や

まゝまゝのまゝふやの

るまゝ

あつてまゝ事なり

秘

中書の初并

中書にありまゝ事なり

中書に

秘

中書にありまゝ事なり

中書にありまゝ事なり

中書にありまゝ事なり

中書にありまゝ事なり

介括よあつらひまがら
まじりてまよひ

つま又りやういせ

^身又めびるういせもあつらんや

^身みよのういせも又あつらんや

富めあつらひりてあつらんや

^身白文のほあつらんや

いふは不富りてあつらんや

のそと

いふのそとあつらんや

^身いふの別當の政所のあつらんや

^身あつらんや

^身いふのあつらんや

^身ありてあつらんや

^身後上乃別當へ白文あつらんや

^身あつらんや

禁中あつらんや

大臣あつらんや

かこみくし 同云 句文めてさう
いとあつたや 如くそと云ふとや
さだま 志るきり 殿上 女事
こまよ くりて 殿上人 とらふさ
かみとて

よ ぬりて せぬわと

白まゆより 都なと ころてまう

きりりし のあつて 意の用いせ
ひく 用さや とさう ありさう

さういの中うて ちあつてのひん

右京大まう 詞

ねこのまひ ありき後

中君の つけとひん

意のひん

さうく ありきん

大君の ちり 中君 減ゆつて
よ ちり ちり ちり 意のちり
おま事 ちり ちり ちり ちり

乞う梅一玉也

おとよや人解りあふぬあつたを

花

白人中巻成川あつせきうととれ
くしと又大君れふ跡よとらりて
さよふ初しく志さひふふあをさ我
心うとと也

うれもくに満さゆり志んあて

何

精を

舟

婦もりうらぬ建てりう精を

うらあふく一白う精をうら

うら

必

大君り後志の精とあらはて
まー南す

たう文雅いさうく

花

是の葉の母宮

かみあはきうさ成いあやうく

美

女三の西の葉乃精とらりに
せうらんのうらぬあや

うまへ

女之北交の葦乃乃新とあや
うく道心ありともみねと
うまへ

ついでとあ〜とみ〜ま
つんか

ついでとあ〜とみ〜ま
つんか

世中とあ〜とみ〜ま
つんか

か〜とあ〜とみ〜ま
つんか

女之北交の葦乃乃新とあや
うく道心ありともみねと
うまへ

罪ありとあ〜とみ〜ま
つんか

葦の世心とあ〜とみ〜ま
つんか

の物おかしん葦乃乃新とあや
うく道心ありともみねと
うまへ

ふかよりと罷流るる
のまを

かこしけおくしあし

^舟 意の四中

お中へあていおるるおるる

^秘 かまへい女とあへて意の孝心

あふおれよ道心とあへて母

まのみくしあへてあへて

あり 箋

^舟 孝心るるく

たの大いものよ

^秘 夕吾へ 箋

よはにととあへてあへて

あへて

夕吾乃白紙じことりあへて

八月十日見く

公りかまれし

^箋 白紙のときくおのしり紙云

箒
月下三羽
石ツワヤニ
君ハ我若ハ
ニ夕レ行ヨト
也

秘 元良親王のち元の月秘
とすまうー川人そり
秘 小 物語をこたにつり
うふ事あり

宮ハ中ク

秘 心よりすくたに六条院へ行く子
ア入の西念
中 志ししとぞ日とも志し
とそりーいせ也

所 少きさこころみつりあり

秘 中 志んふとまらし海あり

所 少くやいりありせん

秘 中 志乃所也すりいりありん

秘 先ニ条院へさうりあり

秘 白ふ内程より中志乃ろふ文

秘 ちりーに中志乃所也りー

秘 ことーや又ニ条院へ白ふ

秘 たりーきりー也

の縁に月成るり光て

句文中中君と二条院あて

にありとにりて形て

中君のさへ

中將のまのりしつる御紙

^案夕雲の使既中御

^秘既中將へ大まのりの月え入る

の奇此にけりひく

かきとておきまれの

夕雲此六君の事へ

いまいしとくまのりえん

^秘句此詞

ひとり月かえりいそよよいそよあれ

えいそよあれ

^案小町集よ中君のさへ男此あ

てかかれあつてさうり月乃

いそあつてあつてあつてあつて

いそあつてあつてあつてあつて

わきふりくちり志あり

箋

うさ物いしの心白くみなり
今中そがくろまきしきこの影う
とつてもかくあねとちか
又それと中乃君れ我も
何とも心にかくぬとも
枕のくくつちりるかか
少よ深くみよ先ん我か
心くねとちりるかか

世中とおひらきあり

おのせうりーいあり

秘

八文の事く一箋

昇

八文のり中さみの心

しらばあさまきし

ととと

箋

八文大君れうけり

人守あとりやう

白

人流

遊仙居

私流字ハタグヒト云心ナレシ

あくを肌えはふらへりてお

おりの

句文此所ニ波と申君大

さうそれしちいひし

か好しうと申す

やうらひし

これ好し方おのうさ

く

私古文大君ありせりし時

のり好しされしひあ

とさうしうにまのし

みて申君のしや

むすし世り好くたり給

りいさうしれし時

昇

申君の父文あり給文

事ハ悲しきれしとん

りしゆしうは白文ハ

ありともはなうにふと結をんを
あしきうあうりて品今れか
るしきとさうり

是のち紀人のやうよ又あまのみま
し美人あそび物しきうあ
さじきともあふひのみとをさる
つさあうん物あしき

^美是のち初よあうさ物の人乃
心るりたりし我れうあうさ

^秘子しつれ婚来し

はましにあしきしてあふしあて
はるまれとも品今乃はしきあ
しきあしき

とれつうあしきあしきあしき
しきあしき

私中君の命にあらはるる
心を我とおくさきん書紙
たしきとあしきあしき

ゆゑにききすてふ月すみれ
かりて

ら右

我心おしくさあふつきじあや

としすてふ山は照月伝て

花後松達

月みての誰をうそをなくさまぬ

としすてふ山はあやみ

和泉守

と栗姨奇山の同縁大和物流

よらりく志れされ侍り部

りてるとしすてふ月すみ

のかりし事かかりさ

是の上の初ふおしくさあんとし

よ付て姨奇山はいつりさあ

方の部よあきとふららは

としすてふ山は月りしあ

よし又申君乃白文り

すてくれらるか山はあ

らりさ

おしくさあふつきじあ

紙

いづくにゆくもよきことありて
月く 美

かくさめり子らにいついよも
とすすて山の月成く

山下風よちるくくぬま

宇治と二条院と成くこの
事く

こよひのさとと成はくす
ら中これ然ゆへ

権乃葉のよとめはかきりてあり

がゆ
何ゆ

家あてのきりりふつひと葉花
接せしあまの権の葉よりる

川号よ及つん

花
昇

権りりしれをりりとさく

権りりしれをりりとさく

秘

宇治と権の本とけつ成く
枝権りりしれをりりとさく

弄

いとりの月らるといじとツキ事
出取不分明れ但後撰よあり
小町り集中あしきる男共い
てくまきこらててんり月のは
あられうり成んすく福んこを
くらりかたれとてすのこり
かめりまれの男ツじ成物とて
さうあま海めて

本三味士也
松云は事等二前より

日より寝あもひと時あま
わつ月成あられとツキをひら
はきれぬ又二かや始月成
おしりろくおしり成てきよ
つと物さくさくさくあり人
月のふかみかいつとせし
なれともすまの人もたに
月成とていつかいつくちさ
なやとあり

白乐天贈内詩莫對月明思此

事損君顏色滅君年

月案の陰氣之故然と生と死と

月み違ひの如くにわかれ

の回ゆるり又乐天の贈内詩を

引是の乐天の江州乃司馬に

た迂の時に送る詩の内トの我

が妻と云ふ又志に志人とも

と云ふの年尼の如く此字

治よりこそ外あり起るる人

ふらぬき所く物

懐姫ゆて

ゆーうとて

大君とかく不食一始ひ

つーとて

この正事

句文はゆて

さうして

昇

中君の御しよりの女(おんな)の御(おん)こと

いふもくくけていんさうせん

笑

中君の詞

私中君の心(こころ)の御(おん)こと

えんせん

中君にこそ

笑

いふもくくけていんさうせん

てんせん

人(ひと)の御(おん)こと

いふもくくけていんさうせん

笑

中君の御(おん)こと

中君の御(おん)こと

その御(おん)こと

中君の御(おん)こと

事(こと)とある人の御(おん)こと

富(とみ)の御(おん)こと

富(とみ)の御(おん)こと

景

白牡丹中君の事と云く
是れもさしと云くもさしと云く
さしと云くもさしと云く
さしと云くもさしと云く

紐

六君の事と云く

人乃か

景

六君の事と云く

いねん物

景

句文子てかく推し

とて 景

あざやまてはさへもたよわ
さへもたよわさへもたよわ

景

是の六君の事と云く

さしと云くもさしと云く

さしと云くもさしと云く

さしと云くもさしと云く

新乃衣たれと云け

花

かろくともふくそつてぬ若ら
あふくくは枯の香あまの
ふくくふふふふふふふふ
ふくく

ふりあのもたつたふく

^養中君のわが射し

はくくはくくはくくはく

^秘六君の後朝のみこ

おとりのくつうふ

^養はくくはくくはくくはく

^{アムガシタ}天下にあまのこ

白文のはくくはくくはく

くくく

私白文はくくはくくはく

くくくはくくはくくはく

くくくはくくはくくはく

くくくはくくはくくはく

くくくはくくはくくはく

らんと此やと對乃此と
あれはうらまひのむらさ
のんこし心くろし
のりもあはれさや

此

六君は此也事と心取らて

結分んとおほせと
おほつれく文つ結のるを

よりとくろし
中君此く人あはすふとる白文

此心

いと此もさうり

中さみの此く人さうり

結くこれの此く

中君

白文

新白文

利 秘に中君とつれあやまれ

あーいりもうらてあました

美

中志し叶おしつらうかて

すうーおえりりるま

うらあもあつうかろ

美

路軟うさりつふらあ成ー

あつれくぬくまて

美

白の中志れつ家あーて

おもかくしーいらかしあーのこ

やまーけちか

志花ぬりあーいりあーの知ら

とよよくーいり

私花鳥の義ある

私すうーあつうーあつうー

さんのおちうーあつうーあつ

ーー 昇 美

かしかくのこるやまーけち

あつーあつー

美

白文の初

すゝ貴がし中らつと

八月十七日

さへくよせきひの事と

新橋とてたう

るふ信部とら

うた人あこいふ

あ一筆

かゝるゝたにと

く実めたうか

物うれと

しとんたうの

よくのまふ

しとんたうの

中君の

るの事と

立れ許り

ゆれまふ

荷と人あわ

人々すあゝぬと云く下にいひ六君
の事成りて中玉の初し

いとよくこそさつやうあれと

白り初しはしやうたにひひ
うへまとも下ふれあはさう
くふやうふりし屋をそと
これハ初ふもくもたうし
あう成かくさうやうあついに
宣り

一
解

白まは初しはしやうたにひひ
うへまとも下ふれあはさう
くふやうふりし屋をそと
これハ初ふもくもたうし
あう成かくさうやうあついに
宣り

行又とくゆりまゝに

六君と 美

所んきしとらうたにあゝぬあうり

六君一にほらうか〜とて
ふと〜ふまふれ〜

^義白の煙の心を納めての如
中君〜り〜り〜り〜り〜り
終り〜り〜り

いりち中〜り〜り〜り〜り〜り
^右あり〜り〜り〜り〜り〜り
う責事志げ〜り〜り〜り〜り
^昇ろ〜り〜り〜り〜り〜り
義

^秘後世中〜り〜り〜り〜り〜り
るやび世の梁のぬ〜り〜り〜り
造の塔世と〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り 義

後のち〜り〜り〜り〜り〜り
しお〜り〜り〜り〜り〜り
るのま〜り〜り〜り〜り〜り

^義け世のち〜り〜り〜り〜り〜り
つまれの後ち〜り〜り〜り〜り

ぬ事りやとらふくくすゆ
みとまおしぬくくく

ありす白よふとらぬ名いふあ
くくくくあせあす白く

福人すくあま

中君此大く形くは堪あ
ゆくたれと海乃くあれそあ
ふゆあ

きふいあま入海あ

中君此目ああ忠ひまひ
あよんくくくりありくあま初く
目くあといくくあくありま

いそまうりし

中君の如く

あひひあくくあつれい

乃乃救あくく人よとされら
事古文姉君乃事あまを
あうの時あうあけく又字あ

海へさあそびにふれぬとまて
いふつゝくわひ

中君此我あしむけり
あふくあけしきあそびのきみ
えあつりつあふとたりあつ
ま

志あそびにけしけし

^愛句の中君此折るじふん
あつあつ

言ふことありあつれあつる

^秋句の初

行るすてあつるあつる
あつすのあつるあつる
よつり

^秋別ふあつるあつる
あつるあつるあつる
あつるあつるあつる
あつるあつるあつる

かゝるに人ようつらほをさし
ふりて白れうらみまつる初へ
私乃多れ心うりこそのまじ
つきて

秘 中君れ也筆へ

美 白れ私乃るのほらりのまふに
つけて去君へほをれうらうら
推すすうしほ初よほいてう
る志ううれと也

け小ありも也

秘 白乃初

美

中君とさう

のま

おさかのほ物さのやか

んおされくさ別とあく物成の
まし中君は白れま
ゆきし心よくもれかたれ

實心乃うことかれら事れを
さし中君の疎略を

まこととせむせむせ感たり
白の雨をいりまらせむとこ
り

思ふやうらむ世も何れ

白文乃位をいづる事

あふ中一君成名うとて

とつあや

喜高ふとそらり流るる也

そとをいりていりつる事

あはれ

吾文よそらり流るる事

ま—あし聊合よ言よあし

つまよふあはれ也

命乃をいりて

えんせしらぬとんみよ命あ

物やよふあし人やあ

えんそ志しぬ今心よの言

あはれ

新しきと例あり

いれのがたにこそまゝにたゆみん

句文のいけり御よ又とくはえ

新しきゆつらん

と朝とくか一君れく人のせ

つらね親よと

やすくはのまきん

松葉子乃地

所くはねのいひのしるは

秘

うらほけのいひ

群

うらほけのいひ

すくはのいひのあま

使のあまのいひ

乃のいひ

女房してはみよりつれなせ

うらほけのいひ

見よと

うらほけのいひ

私に何れも一らの進心サカシラはなし
うゝあつめくすしみるは
心

なやまうけあへ

大志のこころ

とみまうし志がまをものより朝露の
をみまうし志がまをものより朝露の

いづしとささけり名あはれん

いづしと此をれははるる葉

まをん六君成み終つれ

心るが 弊

志がまの六君此を後いりに

志のまうしとささけり名あはれん

く起りしと心とあり

私白文の志の書のこころ

んくは女郎花ふと信り

あや

かすまをたあへ

かこいけい

花

いたしきいしつらあはんとし

春

号北初りりり

かこしゆけらるるしじり

秋

けよ白文のひききり

白北初りり此弁ハかきりり

成弁と文

心やとくそ志りハあんとし

世

又ねふらんぬてあま

物とせと 辨

あう人北中こそるや成事の

春

うう人こそるや此言りあ

ひらう成女のそあうり

しそ人のそあへまればや

うあうらうしそつ編のそあ

中文のそあ心くるり

事しそ人のそあはま

とあは

みふらんくろく

^昇 女れくろくおひさ

すらしによらんおひされ

^美 白の坊子ろうと

人とはゆさよとお

^秘 申悉れくろくおひさ

^美 白の坊子ろうと

くろくおひされ

すらしによらんおひされ

すらしによらん

^昇 六の君れ事

^秘 私申悉れのりえ 以上昇

^秘 申悉れ 美

私申悉れ今の極神と信

^昇 のさいし井人そと

白文れ申悉れとろく

半紙幸のらんくろく

ろくくろくおひさ

松申志の如く 昇巻

あちりにあつての如く

私に松白此あつて申志

よりれもあつて事

昇
白文此あつて也

明海みらぬいふれい何さうに

申文乃らぬ 意慕嫉妬の

昔より行ぬくといふ事

といふていふ事

はらゝるゝ事

也

白文は松よりいふ事

白此申志つていふ事

成る事

又人よりいふ事

事

申志人よりいふ事

西あひせてうきせふとくは
トアテ海にあらせハ食物成云
俗より朝の飯を納あらせと
より合子にりりぬ人よあらせ
とこつちやとアリ
くまわれハ夕ばるる志ん後よ
ころり給ぬ
六君人あらしんといは二日
めれ言乃事こ

物秘抄のすまんのの

秘中君秘く

日くくくくくくくく

河日くくくくくくくく

秘くく山此くけあそあり多か

秘川号日此くく秘并此心

中君字活くゆりやと受す物あり

中君大くくくくくくくく

都くくくくくくくく

秘 昔の山里れまうあまう
大さふのこまつる物とて
弄 山里せりまうこし大さふ
物とて

こぶひいまうこあけね
白れあまうこあけね
あまうこあけね
魚とて物とてのこあけね
枕れこい海とて物とて

弄 秘 秋の心 海 秋の心

あくきふれと
中 秋の心 日 中 秋の心

中 秋の心 日 中 秋の心
物とて物とて物とて
物とて

物とて物とて物とて
物とて物とて物とて
物とて物とて物とて

翠
白文此中君よ為のり

事

白文乃中絶のり

此るやまうま事

懐妊のり

いかりみーのり

母も婦君も早世のすらく

孫く事

又いとまもくも何るれ物

懐妊めて失るは罪少くも

事

その日るさいり文

明る中高り 君よあひら

事

おとこひひらまうてりひよる

夕音く 翠事

中細言君さそひさあて

夕音此君あくとあそひて同事

しておまふ

あゝひのさうま

花白文嫁娶の後三日此妻の
事へ

^秘三ヶ和女嫁へ昇美

此君も心もあつて

^秘薫しとじこやとあひ

あす成るる事とあつて

^秘薫くばい六巻のあはれ

流して半くうらた人あつて

よきうらつ事と口持お

りふん乃多くあつて

流の作と乃心成りてか

く好り

つ方さほよ

夕香れすさほく

人のくよみ好りて

^美薫れ六巻成りてあつて

も福うしとあすのそ
にうしてあは後式を
りらるや也

^秘おのく志まひおぬ福うし

^秘夕香のうりてくさひらり

^秘芝のふりかけぬ夕香の社

うしと思ふ

よわすうしあぬかとうりあう

ましと

夕香の亭へ白たおん千はく

^秘孝子王記の例よかぬう

花鳥にのとりまきうり後し

海す

りらわまのあきうり

^秘三日のあはりらわは事あ

あり

^秘三日のあはの餅ハ銀忌り

りら

めつーのぬ事

^秘 弟の死

つ絲よある事うと

とみりとお給りん

^秘 白文の六巻此のむに於て

しや御給めても酒意を

存ありて人のいそぎく出さる

^美 昇美

あされてふらりと死ておらん

ゆきふれ

水のこたれ雨くくくた出つ番

夏宰相

^秘 雪井橋の兄弟へ 昇美

かきうして出りたる雨さ枝

^昇 白文の巻とお給りん

あふの路中梅雨のけさう

けて

^昇 盃成りらて出さる

箋
白糸へ申の上ひることうし使
のく出乃君と一服へまうま
たの物伊尹勅く

中細きれいしくすめりうに

薫の白くはうく酒風志のけり

まのりーえりうりうと

松
あよとりこせられていなるあ

まの事と薫とのけりま

まのぬくーまかへかろぬと

まのてりあまうり 箋

まれのけりまぬぬうめていと

まのめや

翠
薫のれりうぬけりま

秘
薫のれりぬく 箋

東乃のぬいりうてまひて酒とれ

くりてまやま

秘
薫の出りぬく 翠

箋
信奉のりまらたて御言無也

おひつゝある殿と人をもておぼゆる

おひつゝある殿と人をもておぼゆる

人おひつゝ

兼 季子重記六十八人

四位六人の女のおひつゝそくになつて

りて

兼 ともねのつねは女のおひつゝそく

也細長いらくも人の名物く

五位十人のみかたなりおひつゝそく

兼 是乃二下もはれきりありて

兼 へつゝの常ありてぬよ申傳

ありて

兼 ありてとす

兼 ありてとす

兼 ありてとす

兼 ありてとす

兼 ありてとす

兼 ありてとす

一丈五寸一巻唐きぬ力多くと
色くよあり織物に用てこめ
平絹の次へ衣よりきりめ物
肉とツリ

六位曰人のあやのほろあつら
後かと

とり物に位たりあやの次へ
りた久志さむあし

法令乃外あつら（たみ事とあ

ま河説にあつら

今案延喜式典葉家八十九種
又四種草葉といふ事一はりれ
ともこれと皆草葉といふ事
葉種といふ草葉といふ事一はりれ
草葉の中よりこれと出さる又
極熱といふ事一はりれ式に
見し事一はりれ但内膳司式に
信奉雜薬に中より有蒜春

冬青進自五月至九月于進
くうしーのせしーり夏秋此時
分もく進と倍進しれと極熱
さしゆ名と世倍さるいつげさ
しゆしゆのせしゆさる葉やい
らくきりーられと服用と
付物倍しーり倍さる事さる多
用しる故し

葉乃養さるしゆ倍さるしゆ
とそ物

紙の草葉とさるしゆあさり
夏の暑氣は用さるしゆ

大用れらるしゆさる葉の用さ
事のわりし

は皮をれれ言さるしゆ
まろりさるしゆ

海のわたりと月前しゆさるしゆ
さるしゆさるしゆ又親のまじ

おのれはなほ

何れに

雑事

しん

筆曰或戸うなと兼議

細也

いづれも女

おのれ

しん

かたのあは

れあは

いづれ

あは

何れ

あは

或るの

あは

あは

これと書かざるに
たゞこれと書かざるに
とあるは

名一
之

或る詞
と

一

と

此等
の

あはれ

秘
中

と

と

西

一

紙

^秘海を渡る 花鳥のあやむらび
日久し 眞成にあり 海を渡る
この鳥ある

らくつゆさ

義曰 春 虫く 虫のたらく 巻記

らくつゆさ

はまのうらやま

秘別 ことばの事 ことばの事

ことばの事 ことばの事

阿のあやむらび

^秘阿のあやむらび

阿のあやむらび

わりの阿のあやむらび

阿のあやむらび

心

それよりあやむらび

心

阿のあやむらび

乃て女終りてされたり然つ
〜事〜物〜と
友或は此れ〜と仰りて〜か
なり

丁にて男の女を

^苑 第十八段 起終〜 右も歌う詞

なり

^昇 引歌う詞〜 此時の批判者

也

^秘 あり〜と 起と終の〜くひりて

る故乃批判する

筆付候〜として此の義と

一変する

〜の〜とされふある此事〜と云は

は〜と

^何 論語云

知者言未^下心^上盡也

孝子經

大辨

如^下謝^上

^秘 山^上進^下〜の 忠告〜なり〜也

わいし 終りてしるすなり
しんし 思ふをせしむるなり
あし ありしなり
ろま しまし

私云 とうとういとおもふなり
しんし 思ふをせしむるなり
あし ありしなり
ろま しまし

史五経のなり

史記 漢書 後漢書

五経 毛詩 礼記 凡傳

周易 尚書

史記 漢書 後漢書
史記 漢書 後漢書
史記 漢書 後漢書

わいし しまし
あし ありし
ろま しまし

史五経のなり
史記 漢書 後漢書
史記 漢書 後漢書


~~~~~

又一段

策部

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

新

~~~~~

判の初来

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

女















哥一カハシクシク

歌ノ書ニテ一カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

圖書古書一カハシクシク

カハシクシク

歌ハシクシク

カハシクシク

歌ノ書ニテ一カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク

歌ノ書ニテ一カハシクシク

カハシクシク

カハシクシク



何の事か

是の如きの節云此事

五月乃て其の如き事あり

五日節

金吾園記

屈原古

事、其之畏也

聖武天皇天平十九年五月

養白續日本紀十八

天皇御南殿觀騎射走馬

此日詔曰昔五日節用昌蒲為

覆此來傳此事從今而後

非葛蒲覆者勿入宮中

五月五日節天皇御也此來

つとけ行武德殿

行幸あり十月外辨本節書

の宮内省葛蒲と執と

内省女房人續帝綏と群臣

の事ありて六府強村

の事あり

養白 推古天皇御所始



同仕事久しく断絶れ

江次方うれとのせに

日西宮云天皇出御阿や光れ

うらとつ口口けのうらとつ

鈴奏武徳教よれうらとつ

外弁 謝座 謝酒亦まの節寫

のうらとつ 宮内省 高藩と

能とま内省典業と卒一と

高藩の札口脚とうらとつ

乃怪れ前よらとつ 次御監奏

次續命縵と賜同物とれと

とつてとつとつとつとつとつ

まととつて王卿と賜とあ

祥祥次尼迎諸衛射右史

女将以下四十二人兵衛十二人

先懸的少将騎飾馬出自馬

出徐行不立一的十丈暫留

次記馬勝負馬諸大史給







其年の事いふはつねに

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

えのぬねとけり

祇注月々

舞花の御



九日乃吾人なり

何  
九日宴

月令

重陽日菊有黄花

天數 九秋數九仍曰重陽見

周易

續齊諧記曰桓榮家九月九日

當逢大災可盡家費長房之登

高節採茱萸採頭折菊花

浮酒將接此災桓榮暮而歸

家内雞犬牛馬皆死長房問之

曰汝無災 平城天皇四年九月

九日幸神泉苑兼令下文人賦

詩賜物有差 寬平遺誡曰九月

五日九日文人武士行事繁多

不可忘不可緩

重陽乃宴元の天皇南殿より出

御所よりて内弁外弁あり文人

物士とりあはれて各顔の字とく







式部 外任者下預文人者太  
臣奏仰外記藏人催坊家

私云坊家ハ内教坊也 音楽乃  
〜とりよりのし 内教坊の女

樂とつゝささるる

御帳 左右付 茶菓 右裏 御前  
立 菊瓶 天皇出御  
置物 御札 上置  
御現

内弁以下如御節會  
伴 奏議 召持士 献題

内弁 献 御料 韻次 太子王チカラ 屬  
文者 採韻

文人 次身 採定 次取 文臺 置 内  
弁 傍 内弁 召 講師 次 傳 文

御帳 東

是又 養より 勅 かる 裁之花  
鳥の 鏡より かり せ 物

〜の 詩乃 心と  
難 歌 なるものん



























過失中不及未至の及とんが  
あつちの中あつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつち

一日梅分

あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつち

あつちあつち

あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつち







大いひのき〜

夢よれ作の〜此神

集大いひの〜

い

人のをらひよ

夢よ乃神

い

集大いひの〜

い

思〜いれ時の事〜

あ〜い〜

わ〜い〜

集大いひの〜

い

い

阿秘〜い〜

い

い



<sup>秘</sup>ひん〜

葉菱よれは〜

よお〜

〜

中細云君中替みと〜

多〜

<sup>秘</sup>中細云君の原中よ〜

あり〜

中替君の末つ〜

〜

〜

<sup>秘</sup>ひん〜

〜

葉菱

〜

<sup>秘</sup>原乃出〜

〜

関云原のあり〜



まぬし申細言申替みとれあさ  
く〜〜〜ま〜〜〜

お〜〜〜〜お給て

<sup>秘</sup>菱上れ父方臣の源をいまよ〜

の御あそあつ〜〜〜おわら

あ〜〜

うらとまのつまはな本丁〜

<sup>秘</sup>源中のみつゝいあ〜〜〜

うら〜〜れ終はまぬみれいあ〜

本丁と名〜〜海〜

れとら〜〜〜

あ〜〜

<sup>秘</sup>源れあ〜〜のありしあ本丁れ

と〜〜お出ら〜〜わら〜

源〜〜うら〜〜あ〜

まのお〜〜〜

秘〜〜れとら〜

く〜〜あ〜







と居る事と云ふ也

又河川に流る事と云ふ事なり

く思ふ事と云ふ事なり

和を以て為事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

如何

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり

又河川に流る事と云ふ事なり



來也 見尚書曆陰陽雜書安家說

件塞方不可宥 家業抄

又永久四年十二月二日繼殿額

家業像法性寺殿令住進

云天一方俗謂之長神

巳酉日在艮六午日蛇巳卯日

在震卯五午日斷庚申一日

在巽六午日鳥丙寅日在離

午五午日雞辛未日在坤六

午日廉丁丑日在兌酉五午日

馬壬午日在乾六午日龍戊子

日在坎子五午日龜

自庚巳至戊申十六日在天上

爻曰中神ハ天一神立中央仍

中神と云ハ一統長神と云ハ

五日角也六日天日也事一十六

日仍長也一也事也一也件也

右今多之也事也一也初日此夜也



多うく阿は次の書と  
天一太白雪事伴音可正音一辰  
也假令十丈者以一丈五尺六寸  
六分と云方とを付外に  
わと

之克中神と云海  
田よりいふ  
田裏より見たる  
中神の方

二条院より  
相違の  
田裏より見たる  
二条院



<sup>秘</sup>花鳥河海色々沙汰せしれ物り  
いつまでも然る色々いれ但さうさの  
巻うううううて用ふか所あり  
<sup>弄</sup>花鳥の華然うう  
花鳥よつまひううあり 同書  
花鳥ううう

<sup>河</sup>陽成院と二条院と号うう  
脱履し後御付院二条以北大  
炊御門以南仲小路の東西御院

以西し京都の右跡ううと准拠ふ  
事事ううううう  
<sup>も</sup>二条院の陽成院うう准拠せふよ  
うう河海抄ようせ物れううよ  
てうそ物うめと思ふううう  
うううううううう事物り  
其ゆの棟の巻よ新院の北く  
ううりの及つううとらるる  
二条うう御院の大らうううせ







りしとけりしとてうりるさうは  
法皇院と大入道後の御所ありて  
ろし院の二条院と号ししと  
栄花物語の中とのまのりんを  
これと相違せしよまのまのり  
ろふとりふありよは所と引のせ  
ゆりこれの二条の御所極の事  
を条との程をさしゆりれとま  
てお所のりんに京極せしとら

とてしとらりふありよは所と引のせ  
ゆりこれの二条の御所極の事  
を条との程をさしゆりれとま  
てお所のりんに京極せしとら  
りしとけりしとてうりるさうは  
法皇院と大入道後の御所ありて  
ろし院の二条院と号ししと  
栄花物語の中とのまのりんを  
これと相違せしよまのまのり  
ろふとりふありよは所と引のせ  
ゆりこれの二条の御所極の事  
を条との程をさしゆりれとま  
てお所のりんに京極せしとら

法皇院白文







兼家公家年号東二条天曆母  
后正曆<sup>辛卯</sup>七月供奉積善寺  
也兼家本願仍号法皇院開白  
兼而終世終之注丁<sup>卯</sup>而實也  
勅物云法皇院の本名二条院  
也盛明親王此領し付後兼家  
公修造とくくして里亭<sup>卯</sup>也此  
正曆元年——付以下前より  
丁<sup>卯</sup>の月——

兼河の湯成院花に法皇院乃  
く——と乃と与極尤う難う  
但林卷く——  
苑の兼然——  
中月之よ法皇院と二条院——  
く——先ハ石つけく——とわれん  
法皇院と然——  
ふいふやう——



源氏の約

いなりき事なり

いなりき事なり

新しき事なり

いなりき事なり

いなりき事なり

紀伊守源氏

空蝉君の史

伴藤介 紀伊守

蔵人右近将監

蔵人女将書

いなりき事なり

中門の経

いなりき事なり

奥入見李了王記

古く稱中門

法成寺の娘

又左行成日記



河  
榮花物語之中河邊の御堂と  
多々子法成寺 東山院也 四記云  
京極川 二条の北号中川云々  
東河 賀茂川 西河 桂川 中  
川 京極川

榮花物語の中川云々 中川云々 大  
長安云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
人の信云々 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云

昔の池屋の氷云々 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
多々子法成寺 東山院也 四記云  
今案付也 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
の中川に 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
御り 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
之 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
お遊り 乃云々 多々子法成寺 東山院也 四記云  
秘回云々



水せきいりて涼しきまきり

け初ととりて續古今うりて克後  
節

此多のいゆせれあよせれ入事  
本うけ涼しき中川の音

らととりあり

涼乃初

らととりあり

涼の朦氣し前少の音

けり聞書暑氣の音

けり聞書暑氣の音

御音しきりありて門より

下車をとりて行そすもぬ

ありて是の涼れ家司れ

あられも下車をとりて

ききんやうし前との音

そののののののののののの

は段とて涼の紀行もりあ



遠くまで行くから行く事  
母の心は源の心だわ  
源中此君夢よれ此こそ程な  
くつろぎ新て又の心もあつた  
中人出たりし事いふあつた  
しと紀傳する中川の音だ  
久絵なり  
源中のおりいなりありあり

自然の心よあつた  
もさるるなりあつた  
出あつた久く内裏の  
さあつた心よあつた  
て又さるるの心よあつた  
しつあつた心よあつた  
源中此君夢よれ此こそ程な  
と家つた心よあつた  
子の心よあつた



ふりつゝふあひかしくあやしく

と東山おひるるるまじりと作し

あや

ふりつゝふあひかしくあやしく

奉るふりつゝ

紀伊守先か

とあやしくあひかしくあやしく

ふりつゝふあひかしくあやしく

紀伊守又のあひかしくあやしく

事なりて宣婢れ君まやのさ

ふりつゝふあひかしくあやしく

ふりつゝふあひかしくあやしく

借し せれし

私し人あはけ初りり

あやしくあひかしくあやしく

まのあはれ借まのあはれ

乃ゆりて

その人らしくあやしく



源の約

<sup>秘</sup> 女らくちりしと西しそこのか

これと

これ本丁れうし

この年なりかゆの事やとらふ

ゆつて源れその本丁れうし

しそこのましこれとの約

これまうしきい

<sup>秘</sup> 席

日本紀

御座曰

造 史記之衛 叔封布之茲

注曰徐廣曰茲者蕞序

これまうしきい

しそこのましこれとの約

もとまうしきい

これまうしきい

<sup>秘</sup> 此約をまうしきい

これまうしきい











あつた種々

氷乃名

中川の音

河

と

是こと

夜

花

悉皆

勢

多

明

し

集

み

系

香

乃

秘



初志西白

<sup>秘</sup>わさささ

あさささ

<sup>何</sup>あさささ

あさささ

あさささ

あさささ

月信 玉金寄 伴儀

左相模國

あさささ

あさささ

あさささ

あさささ

<sup>秘</sup>あさささ

あさささ

あさささ

あさささ











あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり

あつらひのり







西面のけりて居る

うらけりて居る

再言 百葉

わがぬらふるを

けりて居る事し源中ぬらふ

是もけりて居る事し源中ぬらふ

とて居る

わがぬらふるを

けりて居る事し源中ぬらふ

わがぬらふるを

けりて居る事し源中ぬらふ

えぬらふる事し源中ぬらふ

けりて居る事し源中ぬらふ

わがぬらふる事し源中ぬらふ

けりて居る事し源中ぬらふ

よれぬらふる事し源中ぬらふ

これとけりて居る事し源中ぬらふ

わがぬらふる事し源中ぬらふ



書にあらふまゝに

おりの事

友つきの由事

まのしつとて

んーりやーりのりる時行事

ふと我名ーるふあーる

時若つるんふーる

くめらるーる

らーらーるとんらるーる

思ふにーる

の事ーる

式つるまの非君ーる

らーり

是ーるに権ふとそりーる

舟渡り

相重乃み

桃園或るま 権舟渡り

巻ー 舟渡り







海の平しと云ふ事  
私言ふ事と云ふ事  
此の事と云ふ事

くわんりつと云ふ事  
あつちのあつち  
あつち  
つと云ふ事と云ふ事  
これと對する物

あつちのあつち  
くわんりつと云ふ物の事  
あつちのあつち  
あつちのあつち  
あつちのあつち

関書動の色  
或は極信の事  
あつちのあつち  
あつちのあつち



かたはれはしつらふれら  
るる月をよとらふは

秘

縁中乃しつらふれら  
るる陳りつてしつらふれら  
るるこれも女乃しつらふれら  
るる

集曰莫傾聽と礼訖の誠ふれら  
深のしつらふれらるる  
又莫言くく経と崔之玉カ

いしつらふれらるる女房との縁  
乃事とらふる月意のふれら  
とらふれらるる

つらふれらるる  
紀作とらふれらるる

くさつらふれらるる  
養居のふれらるる物とらふれら  
とらふれらるる



他勢

とがりりらるるらるるらるる

奥河

私加仔戸波止波利 帳於色多  
礼古留年於々支養又万世  
無己尔世无奇以尼可奈尔奈  
尔又可无安波比尼多字加せ  
又介无安波比尼多字加せ又介  
无 催馬来呂 我家  
我家とうげらるるらるるらるる

らるるらるるらるるらるるらるる  
係年の表れさるあさのなをさそ  
とのののののののののののの  
せしとらるるらるるらるるらるる  
まは女ごとのあるとかろねくた  
らるるらるるらるるらるるらるる  
——とる郷食の事——として純作  
らるるらるるらるるらるるらるる  
らるるらるるらるるらるるらるる







秘  
あつた女もあらぬ  
養日記傳馬也言を辛持り  
みうれなるしりしり  
とつてし海と海と  
ぬらぬらぬらぬらぬら  
脚さひの事と作  
さうららららら  
らららららららら  
あふれと海と海と海と

源氏の内なるもの  
秘  
源氏の内なるもの  
あつた女もあらぬ  
養日記傳馬也言を辛持り  
みうれなるしりしり  
とつてし海と海と  
ぬらぬらぬらぬらぬら  
脚さひの事と作  
さうららららら  
らららららららら  
あふれと海と海と海と







付例し 養回し

何そらうしそ十二とらうり

嬖妍 日本紀

仙源云何そらう高貴し妙や

わてしとらうりよもわてする人なり

養回空蟬の才付巻よ中書と

りよ持中細言右書つ替るる人

のりうり)後よ右書門作とらう

伊ふるのりよとらう信姓うらう

あそ程し)色)多しと別し

ゆ

いつれうらう

秀細よ保のされおのり

それ右書つ替れ其のり

さのりうらう)詞

わ保るのり

空蟬の役し

何しよ







トよの郎長とよのし  
<sup>秘</sup>くまはとよの行( 御長とよ  
ちのよあひ

乃らの親

<sup>秘</sup> 継母や

さししとんを輝(いとのまはし  
うとあむかり

いりん物とよ

紀作とよのまはしとよの物とよの物

おのりあひあひ

石組あひあひ

うとよとよとよ

父乃名あひ書存とよの母とよ

の名とよあひ

<sup>秘</sup>とよとよとよ

父の父とよとよとよとよ

あつとよとよとよとよとよ

て受領れ書とよとよとよとよ



乃事一也

たよとせりり始

源のあいまの居るの始なり

あまよして

され与約石多しなるす

不意

日本紀ノ點ありのり

或又あつた或説をぬれ

あまよ

そまのり

あまよ

男女のあまよの始なり

あまよの始なり

あまよの始なり

あまよの始なり

源の約

あまよの始なり

あまよの始なり

あまよの始なり







ふふ成りておのれをいふ

おう〜おう〜

紀伊守もいふれと伊予守

もいふる事なり

秘策日記

おのれをいふ事なり

伊予守もいふれと伊予守

紀伊

いふ事なり

伊予守もいふれと伊予守

紀伊

いふ事なり

紀伊守もいふれと伊予守

下屋 報告

伊予守もいふれと伊予守

紀伊守もいふれと伊予守

伊予守もいふれと伊予守

伊予守もいふれと伊予守



捨まり

あつしとて

源の山供り

よのよの

友の東陣

あつし

君のさげ

図書源の山名

うらみ

英私  
杜牧至  
在唐夜

いさづ

いさづり

いさづり

小舟

東向の山名

いさづ

いさづり

あつし

小舟



もろき新しき心

物をも給りてし 穴野と小君と

うぐよありしよしぞ

<sup>并</sup>うぐよの物とてし け美水

小君と浮れ出前よりありてし

せよよありしありしよしぞ

とみ給

あしうきあるし心

<sup>花</sup>小君がらしし 是又好し并の美

と目し是しうぐよの物とてし

海らとる給はわらうと浮れ

と御前よりありてし小君よ

とみ給

けごととるし心とてし

是中てし心とてし并の物

<sup>秘</sup>宮野の詞浮れ出前よりありてし

ららありし心とてし

とみ給



孫のつとめ

孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ

孫のつとめ

孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ

孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ

孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ

孫のつとめ

孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ  
孫のつとめ



あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と

なごころしよ

あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と

乃あしあ

あはれしやうし井の宮野の菊と

宮野の菊

あはれしやうし井の宮野の菊と

あはれしやうし井の宮野の菊と

あはれしやうし井の宮野の菊と

あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と

あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と  
あはれしやうし井の宮野の菊と











~~~~~

中将君いりつゝいそぎ

うりさきの初中ぬとくしめ

うりさきの宿女乃り色

うりさき

うりさきのいそぎ

うりさき

うりさきの宿女乃り下乃きしよ

うりさきいそぎ

うりさきのいそぎ

うりさき

うりさき

うりさき

うりさき

うりさき

うりさき

うりさき

うりさき

ゆるる糸ふる糸

きこひつる糸

元蟬れ群つる糸

糸のすし海

糸のすし

細く群 遊仙窟かき 狭くや

小縄 つる糸もらひ

糸のすし

糸のすし

糸のすし

糸のすし

糸のすし

中持り

糸のすし

糸のすし

糸のすし

糸のすし

糸のすし

秘箋

木回へ

紙住保中君よりさうお返事をうけ
たさう申すらうと申すも書信と
うぶと申すはくわが御方乃て
申すはくわが御方乃て
よむつるはくわが御方乃て
の返事

一 紙住保中君より

紙住保中君よりさうお返事をうけ

紙住保中君よりさうお返事をうけ
たさう申すらうと申すも書信と
うぶと申すはくわが御方乃て
申すはくわが御方乃て
よむつるはくわが御方乃て
の返事

紙住保中君より

紙住保中君よりさうお返事をうけ

紙住保中君より

紙住保中君よりさうお返事をうけ

紙住保中君より

それと蝉の音

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

わさび
葉
元野の心

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~







とら海の中ねとらうし新をの  
ら

海との海

中ねと海軍のりしよ海軍と

ら秘密

海軍口宣野乃中將とねら

しよ中ねと約えらら

あしこのらら海軍のり

ら

あし

中將海軍口宣野乃中將とねら

ら

あし

中ねの海軍のり

あし

中ね海軍

あし

あし



ふじし 日次あり

それふたなりわらひしに

葉口は初まよる金言や海も

中ぬ君の月捨年物し

そあらしあしきものそり

のうのせむれ官女もまゝ

ふれむ美事あまきん

あらしそ外あまきん

うらり

ふらふらふらふらふらふら

うらり中ぬふらふら

あらしあらしあらし

うらりあらしあらし

或況下あらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらし

あらしあらし







おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

紙注

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし

おかし



と

押立

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



らこのぶのさし自然よもやまのま  
らん我も好色のうさく人のた  
おさうりされども空野ゆり  
あこのさしと我あつ  
ふと深田のふさく又井と  
ふうくうぬ事さうけこの  
知

あこのさしと我あつ

深田のふさく又井と

あこのさしと我あつ

筆田割と我あつ

出せるの甚美市叶追これと物

るさしと我あつ

は若成るとあこのさしと我あつ

も折のさし

私玄祖乃さしと我あつ

るさしと我あつ

みもあつとこれを割のさし



かきつらいつらな

ふらつらつらな

空舞のりこしらる理や 源乃  
なまらひれきしうねと源氏の  
うのたまはる理とつげてのけふ  
物しうのたまのまゆめなまら  
しけれとこしらる理とつぎて  
女れなと名をけしてらひるま  
と源の思行

いさなつらいつらな

元野のなと源のりたまら  
理とつげとこしらる理の  
女のなと名をけしてらひるま  
よしとこしらる理とつげての  
けふのなと名をけしてらひるま  
つれて受領れとつげてのけふ  
のなと名をけしてらひるま  
つらつらつらな







あまのつきのあらしと

川一舟二首あり一舟畧し

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしと

私之付川一舟のあまのつきのあらしと

筆曰柔者勝強とよりり関書

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと

あまのつきのあらしとあまのつきのあらしと



終りの目録をたし

世と世とをわたりておわり終る

業口世のあな人の心の極

とくも終る世の心

よらそおわれとせよ

ぬらりよの心 終と

とくも終る世の心

くくられた

終よらりよの心

くくられた

空蟬の心 終る世の心

くくられた

くくられた

くくられた

くくられた

くくられた

くくられた

くくられた







因之  
のしせいのし  
いし  
いし

~~~~~

~~~~~<sup>并</sup>~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~<sup>并</sup>~~~~~

~~~~~<sup>秘</sup>~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~











御とゆふ事、貞節、行ふ事、わは  
美月之、因書、えら、さうり、うぐ、さあ  
新事、おろ、る、し、あ、え、下、し、  
は、時、源、中、し、し、あ、ひ、も、そ、ま、ひ、か  
ら、ん、し、

私に、繁の、美、桂、舟、院、也、こ、乃  
宮、蟬、し、と、の、源、氏、一、部、の、貞、女  
み、れ、は、実、事、乃、あ、ら、う、し、  
り、ふ、と、美、鏡、と、わ、う、く、り、さ、れ

し、也、ゆ、後、去、御、門、院、靜、事、書  
意、と、り、あ、し、け、名、と、録、し、  
な、り、ゆ、れ、と、し、あ、ひ、を、建、つ、と、  
ま、つ、る、れ、り、あ、又、お、さ、ね、と、た、ら  
せ、し、時、し、し、り、そ、あ、ひ、あ、と、あ  
新、の、さ、ら、し、し、は、さ、れ、と、  
乃、あ、ら、う、り、さ、ら、あ、れ、り、あ

為、も、あ、ら、ぬ

宛、の、は、ら、あ、ら、う、し、あ、ら、う、し、



しんせいりゅうりつこうきん

花  
しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

秘  
しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん

しんせいりゅうりつこうきん







又深のこゝろに風流のこゝろに  
あつたるの心もあつた

葉のくゞのくゞの深の穴蟬  
あつたる事と申す  
よつとあつたれぬ心

あつたる心

深の御心

葉の媚の心

花のくゞのくゞの心  
あつたる事と申す  
あつたる心

あつたる心

あつたる心

あつたる心

数馬の心

あつたる心

あつたる心

あつたる心

あつたる心

葉の心



わくはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ

あはれはつしんはつあはれ



わのそとまう〜ぬ起〜と貞節  
比類のいお

集つれは〜と貞事〜  
や高の別れ〜と〜  
〜と〜と〜と自然に  
〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と

ま〜と〜と〜と貞女は〜と  
ま〜と〜と〜と〜と

女貞は〜と〜と〜と

宣輝のなま〜と

〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と

つ録の〜と〜と〜と

平生の〜と〜と〜と







私云筆乃華實事の心  
海の心

打事の心

心 并 心

心

筆の心

心 何れ 心

心

心 何れ 心

心

心

心 何れ 心

心

心

心

心

心



ふのあしむまふのあはれ  
うさ

新云しつうの年とばらせ  
す

筆秘の美なる

私云け二首の月 奥入 紙は

ふとふはらうの年とばら

ふのせお取れうさ

あふとふま

深のあしむまふ

みまのあしむ

東南のあしむ

女房のあしむ

あしむ

ふのあしむ

あしむ

私云室輝を水乃あはれ

西ありてよの紀作鳥れ女さ











西の空に 源中君の立ちうれた  
まふおろしや け下乃り 約つて  
よく名とつけて 見ゆるる 名に  
おろし

花より 節白乃出て 月乃光れさ  
ゆるよりのさき

秘葉あり

月より せとあり

河より 月乃さ 白物さき  
〜西の空に 延するく さいおろし

乃〜

ふく名乃さき 秘葉あり

秘 此所の 源乃り 名〜 けりありて

此段の 名乃り 名〜 餘情あり

〜

葉口 名乃の 名 秘 ありて  
の 名〜 ありて 名 ありて  
名 ありて 名 ありて  
〜



人——まねたん

線乃名中一なり

ふとつとるん

あまのほていん

小君と若し——まきんとの湯あそび

くはるん

あつらひらら

川舟よりあそび

殿よりつり終る

葉 葉よれたははら

あつらひらら

二条河原よりとま

あつらひらら

私と若の儀の脚

あつらひらら

はなそく

あつらひらら

あつらひらら



宣輝の御宇に  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

とくはるる

源の名允輝に
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

中乃ちまうれ

果所さりに交領の女や  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

中一のまよひの

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~


集句

うさぎのしほりやうさぎ

源の穴解とあつちのあつち

あつちの中細言のあつち

空蟬のやう小若うり

前前のうら右あつちとあつちのあつち

中細そとらうり 持中細そ兼右

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

源のうらうらとあつちのあつち

あつち

前前のあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつち

あつち

あつちのあつちのあつち

あつち

わねなる

宣輝

ひねつ

源乃

そのわねを

ひねつ

源の

のね

はら

源の

ま

源の

源の

源の

源の

源の

源の

源の

きしつゝの約りさるる

まの弓約りてさるる

まの弓約りてさるる

まの弓約りてさるる

世乃多とふこと

母乃問の事

諸君撥蜂君莫撥度君又子

成我攘 自氏文集

聞書云 継母乃 継子乃 乃乃 乃乃

乃取つてさるる

りてて又りて 継子れ我りて 嫁せ

りてて又りて 継子れ我りて 嫁せ

のありさるる

外私漢れ例あり

外私漢れ例あり

世の多とふこと

集秘 継母乃りてさるる

多とふこと

いづれかゝる事あり

まは守り小器とてこれと衆を

あそ

あまの御心とて

あまの御心とて

あまの御心

あまの御心

あまの御心とて

あまの御心

あまの御心

あまの御心

あまの御心とて

あまの御心とて

あまの御心とて

あまの御心

あまの御心とて

あまの御心とて

あまの御心とて

〜白紙〜

〜おろり〜

〜^秘おろり〜

〜^原おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

〜おろり〜

うらやまのうらやまのうらやま

心算ぬらぬ

空蟬の心算

交^弄頌乃^弄果^弄〜^弄い^弄れ^弄る^弄事^弄又

係^弄氏^弄の^弄う^弄ら^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

思

船^弄月^弄之^弄 葉^弄ふ^弄交^弄風^弄の^弄お^弄〜^弄定

ま^弄係^弄事^弄〜^弄と^弄う^弄ら^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

私^弄之^弄交^弄頌^弄乃^弄書^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

着^弄舟^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

又^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

又^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

又^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

又^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

又^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

い^弄お^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

係^弄氏^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

と^弄ん^弄〜^弄の^弄如^弄事^弄〜^弄い^弄と

水あかりとよ

小君乃らるる野のたきとよ

あふゆきとよ

空野乃初

うらあきとよ

小君乃らるる

あふゆきとよ

小君乃初

あふゆきとよ

^秘空蝉の心小君乃らるる

の作さうとらるる

あふゆきとよ

あふゆきとよ

空蝉の心小君乃らるる

あふゆきとよ

あふゆきとよ

あふゆきとよ

あふゆきとよ

小畠紀

はらり〜はらり

追従さのり

君り〜

源の小畠と

〜し〜

〜ら〜

小畠紀

〜との

源の〜

あり〜

小畠紀

〜

〜

源の紀

〜

源の〜

〜

吾子^何 日本——我子何と云々様也
小君^秘と云々云々云々の宛

その^何らのおきね云々云々

葉田小君へ云々云々計畧云々

云々云々云々云々 秘同云々

私云云々云々云々云々云々

今又孫人云々云々云々云々云々

云々云々云々云々

多の^何り云々云々云々云々云々

紙^何の箱云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

小君云々の宛云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

しうきり作ふかよふれて我
あましうわるとお君のあはし
あまさんそのはくふふは
くひりしとあはし Sewer
えん

わつ子ととわれよ
小君は源平のしうきりとわれ
とあ

あはし

作ふかよふ年しうきり
はくふふはの給

あまさん

小君は源平の給事とあはし

あまさん

しうきり

源のん

あまさん

源のん

装束羽子

かき

御運殿 別當 内藏 寮外 御服

と裁縫了る所

乳御院
水所

遮くも 装束 柄了る所

りや

これとあひまの 500000

小君の事と

心より外より

筆 回数 教書 の 500000

このとく

このとく

筆 回数 教書 の 500000

このとく

筆 回数 教書 の 500000

このとく

このとく

このとく

秘

このとく

真似とうふるを

御り水のみさうを

西月

女もさうなすしを

小君しそくさうり宮野(作)は

うらされしを

おり—あごあうしを

女秘もさうなすしを

是しうり宮野のるを

おらしそくさうり宮野(作)は

うらされしを

小君しそくさうり宮野(作)は

うらされしを

おらしそくさうり宮野(作)は

小君しそくさうり宮野(作)は

うらされしを

おらしそくさうり宮野(作)は

小君しそくさうり宮野(作)は

りてとあり

中將とあり

あゝとあり

とあり

海のなとあり

とあり

とあり

小君の

とあり

小君の

とあり

空蝉

とあり

小君とあり

とあり

何石

とあり

とあり

いひまらし

空蟬—れ愛園—のCure

心りうらよ

穴蟬の心

は股も又ららう—れ我がと

思う—のうれ心わり

いれ程さうぬ—

人よ—これ源中み—られたは

り—つれあ—わ—ら—ひ—ま—そ

ま—つ—あ—ま—ま—い—ま—の—程—を—ら—ぬ

横—さ—り—心—の—ら—ら—ま—の—Cure

て—ま—つ—ぬ—の—あ—は—ぬ—さ

い—ら—ら—の—心—を—ら—ら—

い—れ—ら—

そ—の—あ—ら—

葉—女—れ—性—の—あ—ま—

心—は—勝—の—心—

女—の—思—う—ら—ら—は—は—は—は—


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

名

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

君

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

お

小

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

わ

深の



水きしめたる

源の流を〜流とらむとあり

小舟の舟

とらむ

あ〜〜とあり

く〜め

嘆息の〜忠（源の神）

源

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

源の事〜先を交〜

せらむ但大都の事〜

秘

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり

〜〜〜とあり











くも青木は木末やらのことか  
はたうれおんまそれらに響  
りきりけり

経信の説云けり本入持并伯  
耆木奇不故事也皆以之改  
不故雖不知所避而後頼以  
けり入金葉集如何

行詔抄云くき木に二の端は  
了くくは是木のものか森は

わがみりそ乃森いそきそ  
森乃中くくくく木せこ  
それとそくくそれとわ  
くして森の下よりそれの木  
高きりてんそぬきりく  
きりく似る木は其森より  
みりそれととくくく  
りくくそらくくりてん  
まはくすはやそれとあく







或又件吊其本之杜乃梢乃寂  
頂一り有る也(是と森乃下  
一り)ゆきとられし本ありて見  
る(河をくしていんゆ)は従と見  
違用と云々  
奥義抄引

後拾遺云

ゆはくそわんはゆめくそは  
わんそくそわんはゆめくそは

今勅国史云仁明天皇養和二年

六月勅如開東海東山兩道  
河津之亂或渡舟數廿或  
橋梁不備由是貢調擔吏  
來集河邊累日經旬不得利  
涉宜每河加增渡舟二艘其  
價重者須正稅又造浮橋人子  
得通及建布施屋備<sub>テ</sub>橋寄  
造作新吉用敕急稿云々  
陽成天皇元慶四年云弘仁



十二年國分寺尼法光為救  
百姓濟度之難於越後國古  
志郡渡戸濱建布施屋施  
墾田四十余町渡船二隻令往  
還之人得其穩便年代積  
久無人勞濟屋破損日疇甚  
廢望諸被免越後國信五人  
永令預守箇中  
安之也屋之之れ原一の記

為へく次所へり是とらる  
行法園よりうり原母とてけ  
よや 後報す。

山田らるるそれをせと用ひ  
あせつるひとらうとそま  
とらり後組うりくお世  
れ多とそそ若れるせ屋古  
ふせ屋皆同物れ或説之に  
のん元とらりてふと板のふく



とほとほ〜  
あは〜  
〜  
とほとほ〜

新〜  
〜  
〜

〜  
〜  
〜

女〜

〜

此方宣輝

教〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜







好く一懸一糸と云ふは、  
と作し、  
あつたは、  
し、  
女も、  
小君の、  
乃石、  
あつた

く、  
又、  
ふ、  
一、  
人、  
國、  
保、  
た、  
集、







かゝるに〜おかし〜  
こゝろを

う〜

原の初〜

此そ〜

〜

〜

小君れん中〜

此中〜

原の元野〜

〜

〜

〜

〜

私〜

〜

〜

〜



しもの書よむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり

秘

しもの書よむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり  
よむかへしむかへしむかへあり







